

(19)日本国特許庁(JP)

(12)特許公報(B2)

(11)特許番号

特許第7145569号

(P7145569)

(45)発行日 令和4年10月3日(2022.10.3)

(24)登録日 令和4年9月22日(2022.9.22)

(51)国際特許分類

F I

A 4 7 H 2/00 (2006.01)

A 4 7 H 2/00

A 4 7 H 1/00 (2006.01)

A 4 7 H 1/00

Z

D 0 6 F 57/12 (2006.01)

D 0 6 F 57/12

Z

請求項の数 5 (全10頁)

(21)出願番号 特願2019-131932(P2019-131932)

(22)出願日 令和1年7月17日(2019.7.17)

(65)公開番号 特開2021-16427(P2021-16427A)

(43)公開日 令和3年2月15日(2021.2.15)

審査請求日 令和3年8月4日(2021.8.4)

(73)特許権者 000150615

株式会社長谷工コーポレーション

東京都港区芝2丁目3番1号

(74)代理人 100097515

弁理士 堀田 実

(74)代理人 100136700

弁理士 野村 俊博

(72)発明者 澤瀬 一徳

東京都港区芝2丁目3番1号 株式会

社長谷工コーポレーション内

(72)発明者 吉田 江里子

東京都港区芝2丁目3番1号 株式会

社長谷工コーポレーション内

(72)発明者 日高 徳雄

東京都港区芝2丁目3番1号 株式会

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 カーテン吊下構造体

(57)【特許請求の範囲】

【請求項1】

室内においてカーテンを吊るすためのカーテン吊下構造体であって、
 カーテンレールが設けられた基体部と、
 前記基体部の前端部分から下方に延びる前面カバー部と、
 前記前面カバー部から前方へ突出するように前記前面カバー部に取り付けられた突出部材と、
 前記前面カバー部の前面に結合され、且つ、前記突出部材の上面に結合された結合部材と
 を備え、

前記突出部材には、ハンガーのフックが掛けられるハンガー掛け部が設けられている、
 カーテン吊下構造体。

10

【請求項2】

前記突出部材の前端部分の上面に、ハンガーのフックを掛けるための溝が前記ハンガー
 掛け部として形成されている、請求項1に記載のカーテン吊下構造体。

【請求項3】

前記前面カバー部と前記突出部材は、前記カーテンレールと平行な方向に前記基体部の
 全長にわたって延びており、

前記ハンガー掛け部は、前記平行な方向における前記突出部材の一端部から他端部まで
 延びている、請求項1又は2に記載のカーテン吊下構造体。

【請求項4】

20

前記突出部材は、前記基体部および前記前面カバー部とは別の部材である、請求項 1 ～ 3 のいずれか一項に記載のカーテン吊下構造体。

【請求項 5】

前記前面カバー部は、樹脂部と木材部を有し、前記樹脂部には、当該樹脂部の前面側において前記木材部が張り付けられており、

前記前面カバー部における下端側部分において、前記木材部の下面と、前記樹脂部の前面とによりスペースが区画され、

前記突出部材は、前記スペースに配置された部分を含み、当該部分から前方へ延びている、請求項 4 に記載のカーテン吊下構造体。

【発明の詳細な説明】

10

【技術分野】

【0001】

本発明は、カーテンを吊り下げるためのカーテン吊下構造体に関する。

【背景技術】

【0002】

カーテン吊下構造体としてカーテンボックスが実用化されている。カーテンボックスは、カーテンの上部やカーテンレールを隠すための箱状の構造体である。カーテンボックスは、例えば、建物の内部において窓際の内壁、天井などに取り付けられる。このようなカーテンボックスは、例えば特許文献 1 に記載されている。

【先行技術文献】

20

【特許文献】

【0003】

【文献】意匠登録第 1 5 5 1 4 6 2 号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

ところで、室内において、例えば物干しのために、ハンガーを掛けることができる設備が要望されている。

【0005】

本願の発明者は、まず、上述したカーテンボックスのようなカーテン吊下構造体にハンガー掛け部を付加することに着目した。この場合、カーテン吊下構造体に吊るされたカーテンと、ハンガー掛け部に掛けられたハンガーの衣類とが、近接して互いに触れてしまう可能性がある。例えば、当該ハンガーに掛けた衣類が、室内で乾燥させる洗濯物である場合、カーテンがこの洗濯物に触れて濡れてしまう可能性がある。

30

【0006】

そこで、本発明の目的は、カーテン吊下構造体にハンガー掛け部を付加した場合において、カーテン吊下構造体に吊るされたカーテンと、ハンガー掛け部に掛けられたハンガーの衣類とが触れることを防止することにある。

【課題を解決するための手段】

【0007】

40

上述の目的を達成するため、本発明は、室内においてカーテンを吊るすためのカーテン吊下構造体であって、

カーテンレールが設けられた基体部と、

前記基体部の前端部分から下方に延びる前面カバー部と、

前記前面カバー部から前方へ突出するように前記前面カバー部に取り付けられた突出部材と、を備え、

前記突出部材には、ハンガーのフックが掛けられるハンガー掛け部が設けられている。

【発明の効果】

【0008】

本発明のカーテン吊下構造体によると、カーテンレールが設けられた基体部と、基体部

50

の前端部分から下方に延びる前面カバー部とを有する構成において、突出部材が、前面カバー部から前方へ突出するように前面カバー部に取り付けられ、この突出部材にハンガー掛け部が設けられている。したがって、カーテンレールとハンガー掛け部との前後方向距離を、カーテンレールに吊るしたカーテンとハンガー掛け部に掛けたハンガーの衣類とが互いに触れない程度に大きく確保できる。よって、カーテンと、ハンガー掛け部に掛けたハンガーの衣類とが触れることを防止できる。

【図面の簡単な説明】

【0009】

【図1】本発明の実施形態によるカーテン吊下構造体の構成例を示す側面図である。

【図2】図1のA - A矢視図である。

10

【図3】図1のIII - III矢視図であり、ハンガーの傾きの説明図である。

【図4】他の構成例によるカーテン吊下構造体を示す側面図である。

【図5】図1のC - C矢視図である。

【発明を実施するための形態】

【0010】

本発明の実施形態を図面に基づいて説明する。なお、各図において共通する部分には同一の符号を付し、重複した説明を省略する。

【0011】

(カーテン吊下構造体の構成)

図1は、本発明の実施形態によるカーテン吊下構造体10の構成例を示す側面図である。カーテン吊下構造体10は、建物(例えば集合住宅又は一戸建て)の室内において、建物の窓1を覆うためのカーテンを吊るす位置に配置される。図2は、図1のA - A矢視図であり、窓1周辺の構成を示す。図2では、図1における一部の構造(後述の板状部材29, 31と木材33とレースカーテン2)の図示を省略している。なお、図1は、図2のB - B矢視図である。窓1は、図1のように、建物の構造物に取り付けられたサッシ3により形成されてよい。

20

【0012】

カーテン吊下構造体10は、基体部5と前面カバー部7と突出部材9と結合部材11を備える。

【0013】

30

基体部5には、カーテンレール13が設けられている。図1の例では、基体部5の下面5aにカーテンレール13が設けられている。基体部5は、窓1側の構造物から、窓1から離れる前方(水平方向)に延びてよい。基体部5は、窓1側の部分である基端側部分5bを有する。なお、本実施形態において、前方とは、窓1から離れる方向であり、図1の右方向である。また、図1では、紙面と垂直な方向に延びる2本のカーテンレール13のうち、窓1に近い側のカーテンレール13に吊るしたレースカーテン2を二点鎖線で図示しているが、窓1から遠い側のカーテンレール13に吊るすカーテン(例えばドレープカーテン)の図示を省略している。

【0014】

基端側部分5bは、建物における窓1側の構造物に結合されて支持される。ここで、構造物は、部屋の内壁6(図2を参照)であってよく、基端側部分5bは、図示を省略するが、当該内壁6に、直接、又は他の部材を介して結合されてよい。図1と図2の例では、この結合に加えて、又はこの結合の代わりに、基端側部分5bは、以下のように、額縁15に取り付けられ、サッシアングル17に結合されている。

40

【0015】

額縁15は、窓1に連通する開口部16を形成する。図1と図2の例では、額縁15は、上方が開放されており、図2のように、下側額縁部15aと、左右方向に間隔をおいて位置し下側額縁部15aの両端からそれぞれ鉛直方向に延びる1対の鉛直額縁部15bとを有するものである。この場合、基端側部分5bは、1対の鉛直額縁部15bの上端面15b1に取り付けられてよい。なお、本実施形態において、左右方向とは、カーテンレール

50

ル 1 3 が延びている方向であり、図 2 の左右方向である。

【 0 0 1 6 】

また、図 1 と図 2 において、基端側部分 5 b は、窓 1 を形成するサッシ 3 に設けたサッシアングル 1 7 の上側アングル部 1 7 a に結合されてよい。この結合は、例えばビス 1 8 によりなされてよい。

【 0 0 1 7 】

サッシアングル 1 7 は、サッシ 3 から室内側に延びており、上記窓 1 を囲むように形成されている。サッシアングル 1 7 は、図 2 のように、鉛直方向に間隔をおいて位置し左右方向（水平方向）に延びる上側アングル部 1 7 a および下側アングル部 1 7 b（図示せず）と、左右方向に間隔をおいて位置し上側アングル部 1 7 a と下側アングル部 1 7 b とを結合させるように鉛直方向に延びる 1 対の鉛直アングル部 1 7 c を有する。なお、サッシアングル 1 7 は、額縁 1 5 に取り付けられている。

10

【 0 0 1 8 】

前面カバー部 7 は、基体部 5 の前端部分 5 c から下方に延びている。前面カバー部 7 は、左右方向において基体部 5 の全長にわたって延びている。このような前面カバー部 7 により、前面カバー部 7 よりも前方にいる人の目から、カーテンレール 1 3 や、カーテンレール 1 3 に吊るされたカーテンの上部を隠すことができる。

【 0 0 1 9 】

本実施形態では、基体部 5 は樹脂部 1 9 と木材部 2 1 を有し、前面カバー部 7 は樹脂部 2 3 と木材部 2 5 を有している。基体部 5 の樹脂部 1 9 と、前面カバー部 7 の樹脂部 2 3 は、樹脂により一体的に成形されたものであってよい。また、図 1 では、基体部 5 において、樹脂部 1 9 にはカーテンレール 1 3 が形成されており、樹脂部 1 9 には、その上面側において木材部 2 1（例えば複数のベニヤ板）が接着剤などにより張り付けられている。同様に、図 1 では、前面カバー部 7 において、樹脂部 2 3 には、その前面側において木材部 2 5（例えば複数のベニヤ板）が接着剤などにより張り付けられている。

20

【 0 0 2 0 】

突出部材 9 は、前面カバー部 7 から前方へ突出するように前面カバー部 7 に取り付けられている。図 1 では、突出部材 9 は、前面カバー部 7 の下端部分から前方へ突出している。突出部材 9 は、左右方向に延びている。例えば、突出部材 9 は、左右方向において基体部 5 の全長にわたって延びている。なお、突出部材 9 は、例えば樹脂により形成されていてよいが、他の材料（例えば材木）により形成されていてもよい。

30

【 0 0 2 1 】

突出部材 9 を設けるために、図 1 のように、前面カバー部 7 において木材部 2 5 の下端側部分を切り欠き、これにより形成されたスペースに、突出部材 9 の段差部 9 b を樹脂部 2 3 に接するように配置してもよい。この場合、当該段差部 9 b と前面カバー部 7 とを接着剤で接着してよい。

【 0 0 2 2 】

突出部材 9 には、ハンガー 8 のフック 8 a が掛けられるハンガー掛け部 9 a が設けられている。ハンガー掛け部 9 a は、突出部材 9 の前端部分に設けられてよい。ハンガー掛け部 9 a は、左右方向に延びていてよい。前面カバー部 7 と突出部材 9 が左右方向に基体部 5 の全長にわたって延びている場合に、ハンガー掛け部 9 a は、左右方向における突出部材 9 の一端部分から他端部分まで延びていてよい。例えば、ハンガー掛け部 9 a は、左右方向において基体部 5 の全長にわたって延びていてよい。図 1 では、突出部材 9 の前端部分の上面にハンガー 8 のフック 8 a を掛けるための溝がハンガー掛け部 9 a として形成されている。

40

【 0 0 2 3 】

突出部材 9 は、基体部 5 および前面カバー部 7 とは別の部材として形成されて、前面カバー部 7 に取り付けられる。これにより、ハンガー掛け機能が不要な場合には、突出部材 9 を省略することができる。この場合、図 1 と違って、前面カバー部 7 において、木材部 2 5 の下端側部分を切り欠かずに、木材部 2 5 は、前面カバー部 7 の樹脂部 2 3 の下端ま

50

で延びていてよい。

【 0 0 2 4 】

結合部材 1 1 は、前面カバー部 7 の前面に結合され、且つ、突出部材 9 の上面に結合されている。これにより、結合部材 1 1 を介して、突出部材 9 が前面カバー部 7 に取り付けられてよい。結合部材 1 1 は、木材であってよい。

【 0 0 2 5 】

結合部材 1 1 は、突出部材 9 の左右方向全体にわたって延びていてよい。左右方向に直交する平面による結合部材 1 1 の断面は矩形（例えば正方形）であってよい。結合部材 1 1 において、当該矩形の 1 つの辺を含む側面が前面カバー部 7 の前面に接し、当該矩形の他の辺を含む下面が突出部材 9 の上面に接している。これにより、結合部材 1 1 を介した前面カバー部 7 への突出部材 9 の結合が安定する。

10

【 0 0 2 6 】

一例では、結合部材 1 1 と前面カバー部 7 との結合と、結合部材 1 1 と突出部材 9 との結合は、ビス 1 2 , 1 4 によりなされてよい。例えば、結合部材 1 1 が木材である場合に、結合部材 1 1 と前面カバー部 7 の木材部 2 5 とを木ビス 1 2 により結合させ、結合部材 1 1 と突出部材 9 とを木ビス 1 4 により結合させてよい。多数のビス 1 2 と多数のビス 1 4 が、左右方向に間隔をおいて配置されてよい。このようなビス 1 2 , 1 4 による結合部材 1 1 と前面カバー部 7 および突出部材 9 との結合により、前面カバー部 7 に対する突出部材 9 の結合強度が高まる。例えば、衣類を掛けた多数のハンガー 8 をハンガー掛け部 9 a に掛けた場合に対しても十分な強度を確保することができる。

20

【 0 0 2 7 】

カーテン吊下構造体 1 0 は、基体部 5 の左右方向の端部にそれぞれ結合された板状部材 2 7 を有していてよい。これにより、基体部 5 の下方の空間 S 1 が、その両端において板状部材 2 7 により塞がれる。したがって、基体部 5 と前面カバー部 7 と各板状部材 2 7 により、下方が開口した箱形のカーテンボックスが形成される。

【 0 0 2 8 】

なお、図 1 のように、基体部 5 と天井 2 8 との間の空間 S 2 を前方側から塞ぐ板状部材 2 9 と、空間 S 2 を左右方向から塞ぐ板状部材 3 1 が設けられてもよい。板状部材 2 9 は、例えば、野縁 3 2 にビスで結合させた木材 3 3 に結合させられる。

【 0 0 2 9 】

30

（実施形態による効果）

上述した実施形態のカーテン吊下構造体 1 0 によると、カーテンレール 1 3 が設けられた下面 5 a を有する基体部 5 と、基体部 5 の前端部分 5 c から下方に延びる前面カバー部 7 とを有する構成において、突出部材 9 が、前面カバー部 7 から前方へ突出するように前面カバー部 7 に取り付けられ、この突出部材 9 にハンガー掛け部 9 a が設けられている。したがって、カーテンレール 1 3 とハンガー掛け部 9 a との前後方向距離を、カーテンレール 1 3 に吊るしたカーテンとハンガー掛け部 9 a に掛けたハンガーの衣類とが互いに触れない程度に大きく確保できる。よって、当該カーテンと当該衣類とが触れることを防止できる。

【 0 0 3 0 】

40

ただし、図 1 のように複数本のカーテンレール 1 3 が基体部 5 の下面 5 a に設けられている場合に、複数本のカーテンレール 1 3 のうち少なくともいずれかのカーテンレール 1 3 に吊るしたカーテンとハンガー掛け部 9 a に掛けたハンガー 8 の衣類とが互いに触れないように、当該少なくともいずれかのカーテンレール 1 3 とハンガー掛け部 9 a との前後方向距離が確保されればよい。

【 0 0 3 1 】

例えば、図 1 のように、窓 1 に近い側のカーテンレール 1 3 に吊したレースカーテン 2 を閉じて、窓 1 から遠い側のカーテンレール 1 3 に吊したカーテン（図示せず）を開ける。この状態で、日中において、洗濯物（図示を省略）を掛けたハンガー 8 をハンガー掛け部 9 a に掛けて、当該洗濯物を乾かす場合を想定する。この場合、当該ハンガー 8 の洗濯

50

物とレースカーテン 2 とが互いに触れない程度に、窓 1 に近い側のカーテンレール 1 3 とハンガー掛け部 9 a との前後方向距離を確保しておく。この場合、窓 1 から遠い側のカーテンレール 1 3 に吊したカーテンを閉めた場合に、当該カーテンとハンガー掛け部 9 a に掛けたハンガー 8 の衣類とは互いに触れてもよい。

【 0 0 3 2 】

図 3 は、図 1 の I I I - I I I 矢視図であり、ハンガーの傾きの説明図である。図 3 において、ハンガー 8 と突出部材 9 のみを図示し、他の構成の図示を省略している。ハンガー掛け部 9 a が溝である場合、溝 9 a にハンガー 8 のフック 8 a の先端を引っ掛けると、ハンガー 8 は、鉛直軸回りに回転して図 3 のように溝 9 a に沿う側に傾く。これにより、ハンガー 8 の衣類がカーテンレール 1 3 に吊したカーテンに触れ難くなる。なお、この作用は、ハンガー掛け部 9 a が後述の棒状部材である場合には得られない。

10

【 0 0 3 3 】

また、前面カバー部 7 と突出部材 9 は、左右方向に基体部 5 の全長（例えばカーテンレール 1 3 の全長）にわたって延びており、ハンガー掛け部 9 a は、左右方向における突出部材 9 の一端部から他端部まで（例えば突出部材 9 の全長にわたって）延びている。これにより、多数のハンガーをハンガー掛け部 9 a に掛けることができる。

【 0 0 3 4 】

結合部材 1 1 を介して突出部材 9 を前面カバー部 7 に取り付ける場合に、結合部材 1 1 を、前面カバー部 7 の前面に結合させ、且つ、突出部材 9 の上面に結合させている。この配置により、室内の人から、結合部材 1 1 が突出部材 9 に隠れて見えないようにすることができる。

20

【 0 0 3 5 】

突出部材 9 は、基体部 5 および前面カバー部 7 とは別の部材である。したがって、カーテン吊下構造体 1 0 を実際に設置する時に、ハンガー掛け部 9 a が望まれる場合には、突出部材 9 を前面カバー部 7 に結合させ、ハンガー掛け部 9 a が望まれない場合には、突出部材 9 を省略することができる。

【 0 0 3 6 】

本発明は上述した実施の形態に限定されず、本発明の技術的思想の範囲内で種々変更を加え得ることは勿論である。

【 0 0 3 7 】

例えば、ハンガー掛け部 9 a は、上述では、突出部材 9 の上面に形成された溝であったが、他の手段により形成されてもよい。例えば、ハンガー掛け部 9 a は、棒状部材であってもよい。図 4 は、この場合のカーテン吊下構造体 1 0 の構成例を示す側面図である。図 5 は、図 4 の C - C 矢視図である。図 4 は、図 5 の D - D 矢視図である。

30

【 0 0 3 8 】

棒状部材 9 a は、左右方向に延びており。ハンガー 8 のフック 8 a が掛けられる。棒状部材 9 a は、左右方向に間隔をおいた複数箇所（図 5 の例では、両端部）が、突出部材 9 において本体 9 c から前方へ突出した結合部 9 d に結合されていてよい。このようにハンガー掛け部 9 a が棒状部材である場合において、カーテン吊下構造体 1 0 の他の構成は上述と同じであってよい。

40

【 符号の説明 】

【 0 0 3 9 】

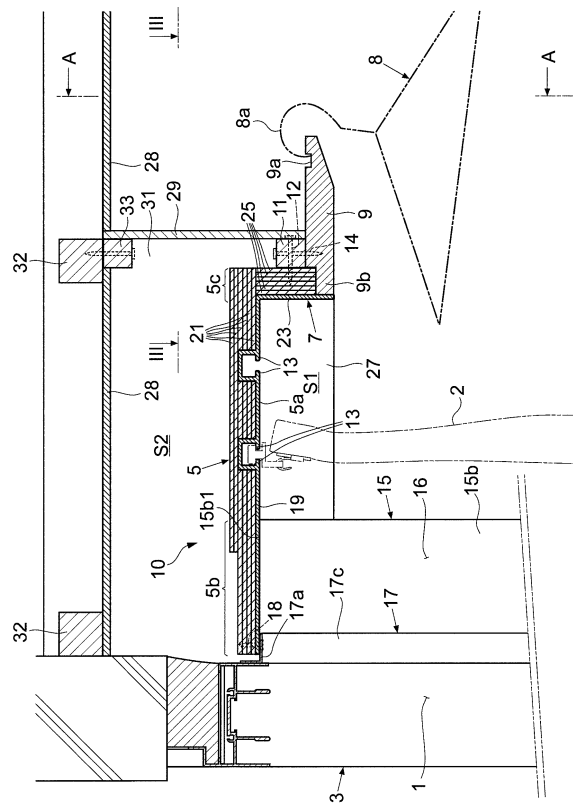
- 1 窓
- 2 レースカーテン
- 3 サッシ
- 5 基体部
- 5 a 下面
- 5 b 基端側部分
- 5 c 前端部分
- 6 内壁

50

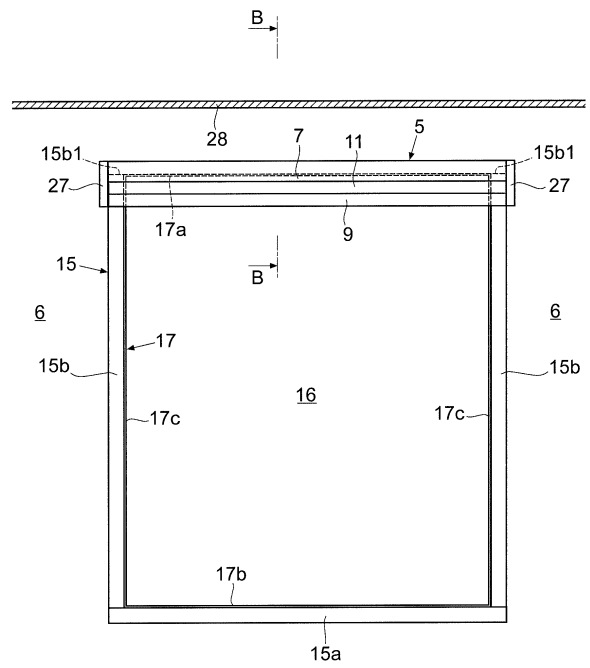
7	前面カバー部	
8	ハンガー	
8 a	フック	
9	突出部材	
9 a	ハンガー掛け部（溝、棒状部材）	
9 b	段差部	
9 c	本体	
9 d	結合部	
1 0	カーテン吊下構造体	
1 1	結合部材	10
1 2 , 1 4	ビス	
1 3	カーテンレール	
1 5	額縁	
1 5 a	下側額縁部	
1 5 b	鉛直額縁部	
1 5 b 1	上端面	
1 6	開口部	
1 7	サッシアングル	
1 7 a	上側アングル部	
1 7 b	下側アングル部	20
1 7 c	鉛直アングル部	
1 9	樹脂部	
2 1	木材部	
2 3	樹脂部	
2 5	木材部	
2 7	板状部材	
2 8	天井	
2 9 , 3 1	板状部材	
3 2	野縁	
3 3	木材	30
S 1 , S 2	空間	

【図面】

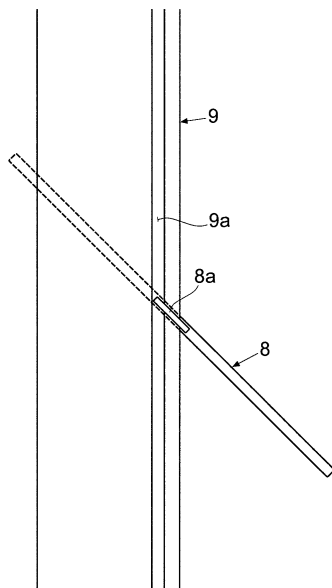
【図 1】



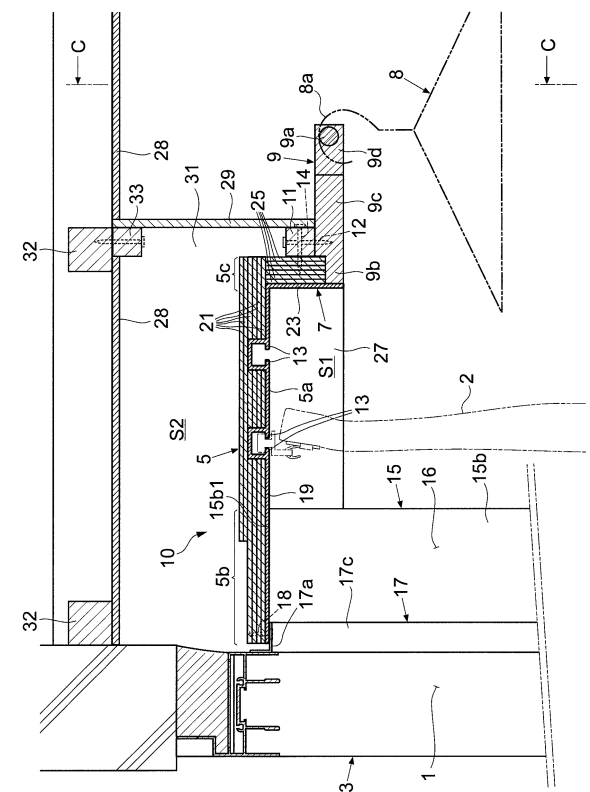
【図 2】



【図 3】



【図 4】



10

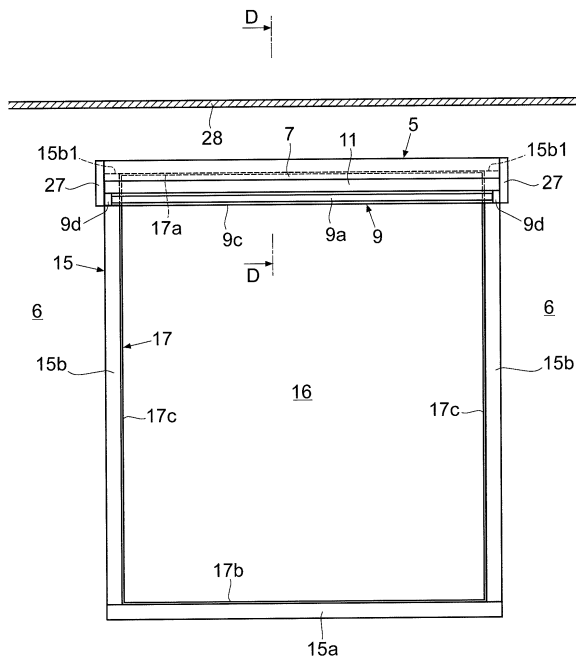
20

30

40

50

【 図 5 】



10

20

30

40

50

フロントページの続き

社長谷工コーポレーション内

(72)発明者 藤原 弘章

東京都港区芝2丁目3番1号 株式会社長谷工コーポレーション内

審査官 砂川 充

(56)参考文献 実開昭57-050285(JP,U)
実公昭43-023878(JP,Y1)
実開昭62-073782(JP,U)
実開昭56-070890(JP,U)
実開平02-119194(JP,U)
特開2019-024978(JP,A)

(58)調査した分野 (Int.Cl., DB名)
A47H 1/00-99/00
D06F 57/00-57/12